私の響転は十刃中最速です（ソプラノ）

バラフバフ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＴＳしたゾマリさんに転生した奴の話。

それだけ。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 10
第4話 …… 15
第5話 …… 20
第6話 …… 27

第1話

「ハアッ……ハアッ……」

一体の破面（アランカル）が砂漠を駆ける。

「やった……ハアッ……じ、自由だ……フウ……」

彼は藍染惣右介が居城、虚夜宮（ラスノーチェス）からの脱走兵である。藍染が虚圏に現れ、多くの虚が新たな力を求め彼の下へと集まったが、力を得ながら彼の兵として戦うことを厭うもの、また彼の圧倒的な力を恐れるものは度々脱走兵として現れていた。

しかし

「……いけませんね」

「!?」

それを許すような藍染ではない。規律を統制する機関も当然ながら存在する。

「……藍染様の指令もなくどちらへ…など、訊くまでもありませんか」

「エ、葬討部隊隊長（エクセキアス）……ゾマリ…ルルー……!」

「おや、第７十刃（セプティマエスパーダ）より先にそちらが出ますか……葬討部隊も名を上げたということでしょうかね」

彼の前に現れたのは浅黒い肌に長い白髪、そして首には骨が連なってできたような首飾りをつけた長身の女性。彼女の名はゾマリ・ルルー。第７十刃にして葬討部隊、虚夜宮における治安維持組織を率いる隊長である。

そして、彼女の前には裏切者が一人。

「さて、大人しくしていてくださいね……動かれると面倒なので」

「な、舐めるなァ……!」

件の破面にも力を得たという自負がある。すぐさま響転（ソニード）でゾマリの背後へと回ると斬魄刀を抜き放ち、彼女の首に横なぎに振るう。すると、容易く刃は彼女の首を通る。

「は?」

喜びよりも驚きが勝る。困惑する彼、その後ろから

「……肩書と名前は知っていても、私の能力までは知らないようです

ね」
「!?」
目の前にいるはずの相手の声が響く。恐る恐る振り向くと
「え？」
そこには彼女がもう一人いた。
「は？ふたっ……え？」
「…まさか、私に対し、響転で挑もうとは……」
困惑する彼を他所にゾマリは静かに告げる。
「改めて名乗りましょう……私はゾマリ・ルルー…〝最速〟の十刃です」
言葉と共に件の破面の首が飛んだ。

斬魄刀についた血を払い、慣れたしぐさで納刀するゾマリ、するとそこへ
「……殊勝なこったな、ええ、オイ？流石媚びることにゃ並ぶ者のねェ七番サマだなァ」
「……」
痩身長躯の男性破面、第５十刃（クインテエスパーダ）ノイトラ・ジルガが姿を現した。ゾマリは彼を一瞥すると不愉快そうに眉を顰め、その場から立ち去ろうとする。
「待てって、犬っころ」
その背にノイトラが声をかける。すると、しぶしぶと言った様子でゾマリは立ち止まり、彼へと半身で振り返る。
「……何か？私も暇ではないのだが」
目線だけノイトラに向けるゾマリ。それに青筋を立てながらもノイトラは揶揄うような調子を崩さず話しかけ続ける。
「…オイオイ、カリカリすんなよ…お前が手柄欲しさに必死こいて駆

けずり回ってんのが、あまりに惨めだからよォ……心配してやってんだぜ？」
ゾマリは眉を顰めながら、努めて冷静に返す。
「……それはどうも…しかし、このように開けた場では……
騙し討ちは難しいのではないか？」
「っ!?てめえ！」
ゾマリが言葉を放った瞬間、ノイトラは斬魄刀を振るうも既にゾマリの姿は無く、斬魄刀は空を切り、地面に突き刺さる。
「……チッ……気に食わねえ……」
ノイトラは地面から斬魄刀を引き抜くとその場を後にする。その瞳に深い怒りを湛えたまま。

響転を駆使し、ゾマリは自身の宮へと向かう。
第７十刃であり、かつ虚圏に規律を敷く葬討部隊の長を務める彼女、その思考は
（やっべー、ノイトラと話しちまったよ、かっけーなアイツ……まだ正面から見ること出来ねえや）
低俗でガチにくだらないものだった。
彼女、ゾマリ・ルルーは『ＢＬＥＡＣＨ』を創作物として読んでいた転生者である。先の思考内容からも分かるように、ゾマリは緊張感ゼロの転生エンジョイ勢であったため、生き残るためにどうだとか、誰々の死を回避したいだとか、そんな考えは一切なく、ただ原作のキャラを間近で見てえやウッヒョーぐらいな適当な意思でこれまで生きてきた。
彼女が葬討部隊の長の座についているのも、原作キャラといっぱい絡めそうだなーあっははーぐらいな気持ちから、原作での葬討部隊の

長、ルドボーン・チェルートが藍染に当部隊の設立を奏上する際、ちゃっかり彼との連名を申し出たからに過ぎない。

虚夜宮、第7十刃の宮。ゾマリが帰還すると山羊の頭骨のような仮面をつけた破面が出迎えた。

「ルルー様……お待ちしておりました」

「……ルドボーン、ご苦労……待たせてしまってすみません。少しゴミ掃除に時間を取られました」

彼こそ先述のルドボーン・チェルート、現在は葬討部隊副隊長とゾマリの従属官（フラシオン）を兼任している。

「ああ、十刃であらせられるのに、何故そうも勤勉に……」

ところで、この虚圏、とにかく娯楽が少ない。見渡す限り一面の砂漠、藍染の指令がなければ殺し合うとか性に耽るとか、それぐらいしかやることがないのが破面というものである。

よってゾマリにとって、ロールプレイを楽しめ、かつ雑魚相手にイキれる裏切者の処刑は娯楽の類であり、別に藍染への忠誠心ゆえとかそういった意図は一切ないのだが

「…貴女様こそ、忠臣の徒。このルドボーン、感服いたしております」

哀れルドボーンが感涙に咽ぶ……いや、実際に涙が見えるわけではないのだが。

ふと、ゾマリが何かを感じ取ったのか、宮の外へと視線を向ける。

「？どうされましたか？」

ルドボーンが怪訝そうな顔で問いかける……いや、実際に顔が見えるわけではないのだが。

「……ふむ……いえ、そろそろ藍染様に現世への休暇でも申し出ようかと思いましてね」

「……休暇？ですか？」

ゾマリの答えにルドボーンはますます不可解そうに眉を顰める……いや、実際に眉が（以下略）。

ゾマリの視線の先では一体の下級大虚（ギリアン）が黒腔（ガルガンタ）を開き、現世へと顔を出していた。

彼女の言葉の真意とは

（やっべー、あれ、石田雨竜とのくだりであったイベントじゃね？出遅れたわー、一話見逃したじゃねえかーくっそー。虚圏いると時間の感覚マヒしちまうからなー……うっし、白哉の辺りはぜってー見逃さねーぞ！）

またもや、くっだらない野次馬根性に過ぎなかった。

第2話

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

雨の中、黒崎一護の己の無力に対する怒りの慟哭が響く。

それを遠くから見つめる小さな影が一つ。

「……喜助の目論みは外れたか…」

黒猫の姿に変化した四楓院夜一である。

彼女は浦原喜助が一護の元へと向かったのを見届けるとその場を後にしようとした、

その時

「……おや、もう終わってしまいましたか……ハア……」

「!?」

突如として彼女の前に白髪に褐色の肌の女性が姿を現した。彼女は外見こそただの猫であるが、その正体は手練れの死神、それも隠密技能のプロフェッショナルであり、気配を察知することに関しては死神の中でも特に秀でている。そんな彼女が目の前に現れるまでその女性の出現を察知できなかったのだ。

よく目を凝らせば女性の背後には黒々とした穴が虚空に浮かんでいた。

(…これは!?……大虚の……此奴)

「貴様……何者だ」

「……ん?」

警戒を強める彼女を他所に暫く独り言を呟き続けていた女性だが、視界の端で動く黒い影にようやく気付いたようだ。

「……おやおや、参りましたね」

どうやら、夜一の存在は女性にとっても想定外だったようで、少し困ったように眉を顰める。

「……警戒は不要ですよ。此度はただの様子見に過ぎませんから」

しかし、その言葉鵜呑みに出来るわけもなく、夜一は臨戦態勢に入る。

「…ハア、どうしてもと言うのなら……」

女性が言葉を続ける前に夜一が攻撃を仕掛ける。猫から人（全裸）へと変化しながらの奇襲
「!?」
虚を突かれた女性の無防備な首に夜一の蹴りが放たれる。そしてその蹴りは容易く女性の首を吹き飛ばした。
「は？」
あまりに呆気のない幕引きに動揺する夜一。しかしその背後から
「…随分と乱暴ですね」
「!?」
件の女性の声が聞こえた。
急ぎ背後に蹴りを放つも、今度は相手を捉えることはなく、空を切る。
「……またですか…ハァ……やはり死神は野蛮極まりない」
相手の能力がどんなものかは分からないが、少なくとも相手は自身の、即ちかつて瞬神と称された最速の死神の攻撃に反応できるほどの実力者であるということは確かである。夜一は警戒度を一層引き上げる。
「…戦うというなら構いませんが、しかし…」
相手は言葉を止めると視線を夜一の周囲に向ける、すると
「!?」
彼女の周囲の空間に突如ヒビが入り、巨大な腕が複数出現し、彼女へと迫る。
夜一はすぐさま回避行動をとり、少し離れた位置から先程まで自身がいた位置を見るとそこには
「な……これは……！」
無数の下級大虚の姿があった。
「これほどの数の大虚を……貴様、一体……」
「さて、ここは退いて頂けませんか？私もあまり事を荒立てたくはないのですよ」
相手は相当の実力者、さらには大量の大虚もいるとなれば、その言葉に従う他なかった。

黙って見送る夜一を背にゾマリが再び虚空に穴を開け、その場を後にしようとする。ふと、思い出したように振り向くと
「ああ、そういえば…何者か、でしたね……名乗っておきましょう、私はゾマリ・ルルー……今はこの名だけでご容赦を…またいつか」
謎の存在、ゾマリ・ルルーはそれだけ言い残すと虚空に消えた。
夜一の心に不穏な翳を残して。

「あれ？……夜一サン…怪しいとは思っていましたが、やっぱり露出性癖が……あ痛ッ」
「…馬鹿なことを抜かすな……伝えることがある」

虚夜宮。
「ああ…クッソ……暇だァーーーー」
第１０（？）十刃ヤミー・リヤルゴは悪態をつきながら宮内を歩き回っていた。娯楽の少ない虚圏。藍染からの指令がなければ食って寝る以外にすることないヤミー。
「ん？」
ふと、前方に見知った顔を見つけた。
「……チッ、ゾマリか……」
先ほど現世より帰還したばかりのゾマリ・ルルーであった。
（…ただでさえ死ぬほど退屈な時に……よりにもよって死ぬほど退屈なヤロウに出くわしちまった）
ヤミーにとってゾマリ・ルルーほど興味を惹かれない存在もなかった。感情のない人形を気取るウルキオラのような面白さもない、ただ藍染に唯々諾々と従うだけの薄っぺらい存在。顔を見るだけで退屈な気分に拍車がかかる気さえするので、無視して通り過ぎようとした。
「…ん？」
しかし、ゾマリから声をかけられることはなかった。ゾマリは礼節

を重んじる女であり、このように何も声をかけないということも珍しかったためヤミーは思わず彼女へと視線を向ける。

ゾマリは笑っていた。

心の底から嬉しそうな、しかし、華やかさなど一欠片もない、ただただ醜悪で粘ついた欲望が滲む下卑た笑み。彼女は堪えきれない喜びを抑えることに精一杯で周りなど全く見えていない様子である。

普段の能面のような無表情とはかけ離れたその姿。

ヤミーはすぐにまた前方へと向き直り、歩みを進める、しかし

（……なんだよ…あんな表情も出来んじゃねえか……）

人知れず、ゾマリに対する評価を上方修正し、退屈が少し和らいだことにほくそ笑むのであった。

ゾマリ・ルルー、その邪悪な笑みの裏に隠された真意とは

（やっべー、夜一さんえっろ!!）

実際醜悪で下卑た内容だった。

第3話

虚夜宮。
不気味なまでに青く澄み渡った偽物の空の下、しかしその日は何処か弛緩した空気が流れていた。
というのも藍染が尸魂界と完全に決別するに辺り、ここ数日中、完全に虚園を留守にしているためである。
よって緩んだ規律を統制する葬討部隊はそれはもう多忙を極めている
はずなのだが
「……また現世か？」
葬討部隊隊長ゾマリ・ルルーは黒腔を開き、密かに現世へ向かおうとしていた。
しかし、褐色の肌に金髪長身の女性破面、第３十刃（トレスエスパーダ）ティア・ハリベルにその姿を見咎められる。
「……ハリベル……ですか」
彼女の出現にゾマリは露骨に辟易した表情を浮かべるもそれ以上言葉を続ける気もないようで、彼女の存在を完全に無視してそのまま現世へと向かおうとする
と
「オイ！ゾマリてめえ、ハリベル様が声を掛けて下さったんだから、気の利いた返事の一つや二つ返せや、カスが!!」
ハリベルの従属官が一人、エミルー・アパッチがゾマリに噛みつく。
しかし当のゾマリはどこ吹く風で、完全に無視を決め込む。
それにアパッチが一層いきり立ち、声を荒らげる前に
「……そこの馬鹿に賛同する訳じゃないけど…実際何のために現世に行くわけ？……このタイミングでさ」
アパッチと同じくハリベルの従属官であるフランチェスカ・ミラ・ローズが奇行の真意を問う。
「……ハア……面倒な……」
それに対し、ゾマリはうんざりした表情でミラ・ローズへと向き直

り、如何にも面倒臭そうに返す。
「……当然ながら全ては藍染様の為です…それに、ルドボーンは優秀ですから、私が抜けた程度で支障を来す筈もありません…それでは失礼」
それだけ言うとすぐ様再び黒腔を潜らんとするゾマリ。
しかし
「…答えになっていませんわよ？受け答えもまともに出来ないんですの？」
ハリベルの従属官最後の一人シィアン・スンスンが、その背に吐き捨てるように呟いた。
その言葉にゾマリの動きがピタリと止まる。
「……ピイピイとよくもまあ…小娘どもが」
ポツリとその言葉が紡がれた瞬間、
突如としてゾマリを中心に砂ぼこりが巻き上がる。
やがてそれが晴れると、ゾマリへと斬魄刀を抜き放ち斬りかかっているハリベルとそれを同じく斬魄刀で受け止めているゾマリの姿があった。
「…何のつもりですか？」
ゾマリが額に汗を滲ませながら問いかける。
「…一つ、警告しておく……私の部下に手を出してみろ……貴様の素っ首叩き落とす」
それだけ言うとハリベルは剣を引き、従属官を伴ってその場から立ち去る。
ゾマリは暫くその背を見つめていたが、やがて黒腔の中に消えた。

第７十刃ゾマリ・ルルーは虚園の大多数から藍染の忠臣と見なされている。その死の形、陶酔もまた藍染への陶酔と捉えている者が殆どであろう。
しかし、ティア・ハリベルは違った。

思えば、ゾマリのハリベルへの態度は初対面の頃から悪かった。
藍染のことを第一に考えるのならば、ゾマリと同じだけ忠義に厚いハリベルの存在は歓迎すべきであるだろう。
にも関わらず、いつも最低限の言葉しか返さないどころか、同じ空間にいるのも苦痛であるかのようにハリベルとの接触を避けていた。
故にハリベルは理解した。
この女が陶酔しているのは藍染にではない。
この女は藍染に仕える、自分自身にこそ陶酔しているのだ。
よって自身と同じく藍染に忠実なハリベルを、自身の株を奪うような相手を、目障りに感じているのだろう。
命令には額面通り忠実に従うハリベルやゾマリと異なり、自身の裁量権内でだが、比較的自由を利かせるウルキオラには穏やかな態度を示すのが、その証左であろう。
故にハリベルはゾマリに気を許すことはない。未だ具体的な行動には出さないものの、いつか自分達に牙を剥く、そう強い確信を持っていた。

黒腔内を駆けるゾマリ。
その心の内では恐らくハリベルをどう始末するかのおぞましい算段が
(ハリベルかあー…アイツと並ぶとコンパチみてえでやなんだよなあ〜)
巡らされていた方がいろんな奴の気苦労が報われていたことだろう。こいつにハリベルを疎ましく思う気持ちなど微塵もない。
(褐色長身女破面って、キャラ被り過ぎじゃん……好きなキャラだけど、一緒にいると収まり悪いし……完全にこっちが下位互換だしなあ…)
こいつの態度の裏にあったのは、ただ並んだときに見映えが悪いか

らあんま近くに居たくないというだけの謎ポリシーのみであり、深い考えも強い負の感情も一切無かった。
だが、一方で
(あの三人娘…好きだけどウザ絡みは勘弁だわー……間に合わなかったらどーすんのさ)
ハリベルの従属官へのイラつきは、理由はどうあれ、本物であった。
果たしてそれほどまでに急いで現世へと向かう目的とは

「クク…フフフ」
ゾマリが不気味に笑う。
その視線の先では

空き地で子供たちがサッカーをしていた。

いや、よく見ると小学生ぐらいの中に高校生っぽいのが一人紛れているし、つーか何だったらサッカーというより取っ組み合いに発展しているのだが。
やがて高校生と取っ組みあっていた子どもが巨大な棍棒を何処からともなく取り出し、高校生へと振りかぶった。
と、その瞬間、
「ジーン太ーどのー!!!」
眼鏡をかけた謎の筋肉ヒゲダルマが現れ、空き地に高校生と棍棒小学生の悲鳴が響く。
「あはっ、あはははは!」
その様子にゾマリは満足げに笑う。
そう、ゾマリの目的、それは原作単行本においてオマケ的に描かれていた尸魂界篇時の現世の一場面を、実際に観ることであった。あれだけキレてこれかよ。
と、一人過呼吸気味に笑うゾマリの背に

「いやー、あの人ら観てて飽きないっスよねー」
一人の男が声をかけた。
「フフッ、ええ、本当に…私もつい笑っ……」
ゾマリはその言葉に思わず応えてしまうも、すぐに我に返り、口を紡ぐ。直ぐに相手から距離を取り、改めて口を開く。
「……貴方、何者ですか？」
その下駄に緑と白のラインが入った帽子が特徴的な男が、わざわざ分かりきっていることをかっこつけて訊いた目の前の愚者の問いかけに、答える。
「…こりゃどーも、ご挨拶がまだでしたね
浦原喜助、以後お見知りおきを……破面のゾマリ・ルルーサン？」

第４話

「……浦原……死神が一体何の用ですかね？」
突如として現れた謎の人物、浦原に対し警戒心を顕わにするゾマリ。
その問いかけに浦原は意外そうな表情を浮かべる。
「アラ？……この義骸、霊圧が漏れない特別製なんスけどねー……ボクの事、誰かから聞いてたりします？
例えば……アナタの飼い主とか」
核心を突いたようなセリフを意味深な笑みと共に発した浦原。
対してゾマリは訝しげな表情を見せるだけで大きな変化はないように見えた。
（……浦原さんやん！なんで!?ちょっ、えっ、ちょっ、ど、どーしよ！心の準備出来てねえし!!生、生浦原さんじゃん!!!序盤じゃ、いっちゃん好きなキャラなんすけど!!カメラとか持ってくりゃ良かったぁー!!チックショー!!!）
彼女の内心は大荒れでロールプレイの趣味がなければサインを求めて不用意に近づいていたことだろう。
「……こちらに争う気はありません……今回もまた様子見に過ぎませんから、大人しく…」
取り敢えず一旦気持ちを立て直すために、一時撤退を目論むゾマリ。しかしその言葉は浦原の呆れたような言葉にかき消され、最後まで続けられることはなかった。
「……様子見、ねえ……そちらがどうであれ、コチラはそうはいかないんスよ……のうのうと敵地のど真ん中に忍び込んだんだ…覚悟は出来てるでしょ？」
先に動いたのはゾマリだった。
響転を用いた高速移動で浦原の背後に回る。
浦原の目の前に分身を置いたまま。
「!?」
ゾマリの斬魄刀が浦原の首へと横凪ぎに振るわれるも、間一髪腰を

落として回避する。
　そのまま距離をとる浦原。
「…おっと……これは…驚いた」
　目の前にいる二人のゾマリを見据えながらそんなことを呟く。
「…白々しい……貴方のことだ…どうせ見当がついているんでしょう？」
　ゾマリは眉をひそめながら吐き捨てるように言った。
　浦原は肩を竦めながら答える。
「…響転、破面が用いる高速移動術っスね……瞬歩とはまるで異なるんで、夜一サンが分からなかったのも道理っスね」
「そう、響転と貴方達死神の移動法との違い…肉体構造の違いというのもあるが、何より大きいのは…」
「…響転は霊圧を感知出来ない、ってとこでしょ？」
「……本当に忌々しいですね、貴方」
　ゾマリは不愉快そうに歯噛みするも、一度鼻を鳴らすと余裕そうな笑みを浮かべる。
「…そこまで理解しているならば…どうです？私を追うのは諦めて素直に退いていただけませんか？」
「ご冗談を…」
　それに対し、浦原は不敵な笑みで応えた。
　と、同時に

「それは残念」
「ッ！」
　再びゾマリが背後へと出現する。
　しかし
「!?な、これは……！」
　今度はゾマリの周囲に6つの光の塊が出現し、その身を拘束した。
「…縛道の六十一、六杖光牢…確かに気配を察知することは難しい……しかし、貴女の戦い方はあまりに単純です…来るのを見越して鬼道を用いることは容易い……ご安心を、すぐには殺しませんから」

「くっ…こんなもの」
ゾマリは額に汗を滲ませながらも直ぐ様拘束を脱しようとする、しかし、
「縛道の六十三、鎖条鎖縛」
「なっ！」
浦原の攻勢が止むことはない。
「縛道の七十三…」
そして、遂に王手をかけんとしたその時
「…ハア……単純なのは貴方では？」
「!?」
浦原から少し離れた場所からゾマリの声が響いた。
直ぐ様のその場所へと視線を向ければ既に黒腔の内部にいるゾマリの姿があった。
鬼道を放っていた地点に向き直れば、相手の姿は影も形もなかった。
「……では失礼、賢しい死神よ…またいつか」
「くっ！」
浦原はゾマリへと斬魄刀を振るうもその直前で黒腔が閉じてしまう。
浦原は夜一からの情報、そして先程までの隙だらけで笑い転げていた様から、相手は自身の力に酔い、常に敵を侮る姿勢でいるタイプだと考えていた。
しかし、どうやら侮っていたのは彼の方であったらしい。
「……クソッ…」

（あっぶねー!!!）
危機感ゼロで常時お客様気分のゾマリは黒腔の中を移動しながら心底安堵していた。先程は狙って縛道から逃れた訳でも無く、無駄に

響転を駆使して広範囲にかっこつけて移動していたがために運よく逃れたに過ぎない。そのことも含め、これまでの軽率な行動を反省し、ようやくこの女も危機感というもの覚えるようにな

（……いやー、しっかし、浦原さんはカッコいいなあ、やっぱ!!）

らなかった。反省もほどほどにお気にのキャラのかっこよさを脳内で称え始めた。黒腔を抜ける頃には落ち着いていたが、その日は矢鱈と機嫌がよく、そのことでハリベルに警戒され続けることとなった。

（…成体の破面、それもあれほどの実力者……これは……不味いっスね）

ゾマリが去った後、浦原は内心焦りを見せていた。成体の破面であるゾマリの背後には藍染がいるとみて間違いはないだろう。前回のゾマリの出現の際、彼女は何かを狙っていたがそれに間に合わず落胆している様子だった。あの場で狙うに足る物、即ち崩玉。藍染が既に彼自身が作成した崩玉を有している可能性はあれど、完全なものではなく、それゆえ浦原が朽木ルキアの霊体に隠した崩玉を狙っているのだろうと考え、破面のレベルも決して高くはないだろうと見積もっていた。

しかし、そんな甘い考えは、元隊長格二人を以てして、二度も逃亡を許したことで粉々に打ち砕かれた。

戦闘に移行してすらいなかったものの、相手の実力が相当のものであることは疑うべくもない。

そして何より

（……あそこまで会話が可能とは……）

虚とは、常に破壊衝動、殺戮衝動に駆られている存在であり、基本的に会話が成り立つことは稀で、また例え成り立ったとしてもまともなものは望めない。

それがあそこまで冷静に、さらには傷も負わないうちから戦いを避けるような様子すら見せていた。
虚には死神の斬拳鬼走に相当する技術は存在しない。代わりに彼らにあるのは死神をはるかに超えた肉体性能である。
死神は知性で、虚は膂力で対抗する。
破面が何故脅威であるのか、それは死神の知性と虚の膂力を併せ持つからだ。
それがあれ程の完成度を持って現れた。

声をかける前に彼女が覗かせた、破壊以外に見せる喜色、虚の性から外れた感情の発露。

その朗らかで不吉な笑い声が浦原の耳にいつまでも残っていた。

第5話

「……私に、ですか？」
「ああ、藍染様の命だ。名指しでな」
ゾマリ・ルルーは虚夜宮を歩いているところを第４十刃（クアトロエスパーダ）ウルキオラ・シファーに呼び止められ、彼が藍染から命じられた黒崎一護の観察に同行するよう伝えられた。
「……確かに現世には何度か行っていますが……」
「すぐに済む。お前もそう虚圏を留守にするわけにもいかんだろう。別に特別なことをしろとは言わん。付いて来るだけでいい」
困惑するゾマリを他所に淡々と言葉を続けるウルキオラ。いずれにせよ藍染の命であれば従わざるを得ないので、ゾマリはおずおずと了解の意思を示す。
「……まあ、藍染様の命であるなら……」

「……ハア…」
深いため息を漏らすゾマリ。その視線の先では
「ぶっはーーっ！まじィ！」
「当たり前だ。そんな薄い魂、美味い訳がないだろう」
仲睦まじく(？)語り合うウルキオラとヤミー・リヤルゴの姿があった。
(疎外感やべーー……)
ゾマリは内心辟易していた。ヤミーがついて来るのは原作の流れで予想できたことだが、それより何より二人きりの時には最小限の反応しか返さなかったウルキオラがヤミーが来た途端饒舌になったことで居た堪れなさを感じていたのだ。
ヤミーの口数が多いのもあるだろうが、仕事中に差ほど親しくもない人間と二人きりになってしまい、気を遣って話しかけるも最低限の

返事しかしない不愛想な相手が、親しい人間が現れた途端にそいつと饒舌に語りだすというのは仕方ないことと分かっていながらも一抹の寂しさと怒りをもたらすも
（……そんなに私との会話は不快だったのか？ええ？大体こっちもテメエと話してえわけじゃねえんだよ！凍った空気を和ませてやろうっつう気遣いなんだよ、馬鹿。テメエ心がねえとかスカしてんじゃねえよ、テメエにねえのはなあ……）
　のどころではなかった。前世の記憶でも刺激されたのか、ゾマリの心は荒れに荒れ、珍しく本気でキレていた。この沸点の低さ、暴走ぎみの思考は虚の性によるものだろう。彼女が生来狭量であるからではない…と思いたい。
　しかしゾマリ自身、このままではいけないとも思っていた。
「……まあ、いいんじゃないですか…騒ぎを聞きつけて目標も来るでしょう…」
　よって吐き捨てるように呟いた後にその場から少し離れようとする。とにかくストレス源から離れ、観光でもして精神を落ち着けてこようと意識を別の方向へと逃がしている最中に
「…どこへ行く？」
　背後からストレス源の声がした。思わず斬りかかりそうになるが何とか踏みとどまる。やっぱり沸点低いな。
「……二人だけで充分でしょう？……私は周囲を警戒してきますよ」
　絞り出すように言葉を発し、何とかその場から立ち去る。ウルキオラもその言葉に納得したのかそれ以上追求してくることも無かった。

「貴様っ?!」
「……また、お会いしましたね」
　その場から立ち去り、仕事を放棄して市内観光でもしてくるかと考えた穀潰しゾマリはその道中で見知った顔に出くわした。

浦原喜助と四楓院夜一は破面の出現を探知し、ウルキオラ達の元へ向かう最中であったようでその顔には焦りが滲んでいた。
ゾマリとしても今は観光が大事で、いや、宣言通り索敵に務め、ここでこの二人を足止めするのが正しい行動なのだろうが、とにかくこの二人をどうこうという意思もなかった。故に無気力な態度でそっけなく応じる。
「ええ、お久しぶりです。……まあ、ゆっくり話している暇もなさそうですが」
そうこうしている内にウルキオラ達のいる場所に霊圧の揺らぎが生じた。
どうやら会敵したらしい。
「……っ！喜助!!」
夜一は焦りから浦原へと声をかける。
「……どうぞ？早く行ってあげてください。でないと……死んでしまいますよ？」
ゾマリを無視することは出来ないが、浦原は味方の危機にやむ無く見逃す選択をとった。
その背を見届けると、ゾマリは悠々と観光に向かった。

「…よしっ……もう一回だ！」
空座第一高等学校一年、浅野啓吾は一人、市内のゲームセンターでＵＦＯキャッチャーに興じていた。彼とて友人がいないわけではない、寧ろ多い方だがその全員に誘いをすげなく断られ、現在一人悲しくやけくそ気味にぬいぐるみと格闘している。
あまり欲しくもない景品だが、取れたら後日話の種にでもなるだろうと考えて気軽に初めてみたところ、彼にはＵＦＯキャッチャーの才能があったらしく、面白い程に景品が取れ、現在獲得した数が二桁に向かおうとしている。

そんな中、ふと店内にいた一人の女性が目についた。
女性は１８０ｃｍ以上はある高身長で、顔つきから外国人らしくそれだけでも目立つのだが、その髪色は白く、対して肌は褐色、そして何よりその服装は全身白でどこか聖職者を思わせる格好をしていた。
女性は何やらじっと一つのＵＦＯキャッチャーの台を熱心に見つめていた。
（…不思議な人だな）
啓吾も初めは特に関わるつもりもなかったが、
「……」
あまりに熱心に見つめていたため
「…あの、欲しいんですか？」
思わず声をかけてしまった。近頃奇妙な人間ばかり見ていた弊害とも言える。
女性は少し驚いた様子を見せた後、
「…ああ、いえ、見ていただけですので」
と断ったものの、やはりあの様子を見るに嘘だろう。
「……良かったら、俺が取りましょうか？」
何故そこまでする気になったのかは啓吾自身にも分からなかった。恐らく友人全員に誘いを断られたのが、かなり堪えていたのだろう……度々あることとはいえ傷つかないわけではない……寂しさから無意識に人との関わりを求めていたのかもしれない。
「…あの、私…持ち合わせもなくて……」
と固辞する女性に
「ああ、大丈夫っス。俺の自己満足なんで」
と、そこまで話して彼は女性がなかなかの美人であることに気づいた。先程までは格好があまりに奇抜すぎてそちらにしか目が向かなかったのだ。
尚も遠慮する女性にややキザったらしい態度で
「……大丈夫、俺に任せて」
と囁き、やや面食らった女性を他所に台に向かう。
無駄のない動きで景品のぬいぐるみを勝ち取ると女性へと渡す。

「…さ、どうぞ……」
と言ったところで少し冷静にそのぬいぐるみを見てみれば、頭頂部に触角、頭部に三つの目、胴体にも顔がついた奇妙奇天烈なデザインをしていることに気がついた。
「……なんスかこれ」
啓吾は自分が取ったくせに思わず呟く。
「…さあ？……恐らく、めろんか、くっきー」
「はあ…？」
「いえ、何でも……ふふっ」
何が面白いのか女性は口元に手をあて、上品に笑う。
「……面白い人ですね…ありがとうございます。大切にしますよ」
その笑顔が自棄に艶めいていて、啓吾は少し気恥ずかしさを覚え、顔を背けた。
少し間を置いてから、下を向きつつ啓吾は呟く。
「あの、良ければなんスけど……この後一緒に…」
とそこまで言ったところで顔を上げると
「…あれ？」
女性の姿は既に無かった。

「…遅かったな」
ゾマリがウルキオラの元へ戻ると既に彼は黒腔を開き、虚園へ戻る直前であった。
「……ええ、まあ少し…そちらは？」
「……ああ、もう充分だ。藍染様には報告しておく、貴方が目をつけた死神もどきは
殺すに足りぬ、塵（ゴミ）でしたとな」

藍染への報告終了後、
「…何故だ？」
「はい？」
ゾマリはウルキオラに呼び止められた。
「……何故浦原喜助と四楓院夜一を見逃した」
ウルキオラがいつもの無表情で問いかける。するとゾマリは何でもないような調子で今さっき考えた言い訳を答える。
「……ああ…貴方が例の死神もどきを気に入ったようでしたので」
「…どういう意味だ？」
ウルキオラが怪訝そうな声音で尚も問いかける。
「あのままでは彼はヤミーに殺されていたでしょう？貴方もだからあのタイミングで退いたではないですか？」
「……」
「……気づかないうちに身を侵し、いつの間にやら全身に回ってどうしようもなくなる、それが、愛、というものですよウルキオラ。貴方がそれと気づいていないだけです」
クソサボり魔が得意気な調子で意味不明なことを語る。
「…理解できん」
「ですから、理解しようとして出来るものではないのですよ。……ああ、それと先程は庇っていただきありがとうございました。」
先程の報告会、ウルキオラの視てきたものを共有したのだが、その内容において、彼はゾマリの動向に気付いていながら、視線はヤミーの方に合わせたままで、そこに意識を割くことを努めて避けていた。
「…庇ったつもりはない。理由を聞く前に罰することもないと考えたまでだ」
「それでも、です。…貴方がいつか愛を…心を知るときが来ることを心から祈っていますよ」

ウルキオラ・シファーにとってゾマリ・ルルーは理解に苦しむ存在であった。
破面、例え人型になろうとその性は虚と大きく変わるものではない。
それはウルキオラも例外ではなく、落ち着いた態度ではあるが、言動の端々に残虐な本性を滲ませている。
故にこそ、理解できない。

ヤミーが魂吸(ゴンズイ)で周囲の人間の命を奪った際、ウルキオラはゾマリが怒りの念を抱いていることに気づいた。
故にその場から離れようとした際も頭を冷やそうとしていることが分かっていたために見逃したのだ。
何故、怒る？
食料か玩具に過ぎない人間が死に、何故……。
浦原喜助と四楓院夜一を見逃した際、その意図が理解できなかった。
理由を聞いても、尚理解できなかった。
しかし、確かに思い返せば、自身があの死神もどきに何らかの関心を抱いていたのは事実だ。
心とは、何なのか。
奴なら分かるのだろうか。
それより奴が持っていた何かの生き物を象ったあの謎の物体は何なのだろうか。
やはり理解できない。

第6話

「……やあ、よく来たね。頼まれたものは出来ているよ」
その日、ゾマリ・ルル―は第８十刃（オクターバエスパーダ）、ザエルアポロ・グランツの元を訪れていた。
「…手数をかけますね、ザエルアポロ」
少し申し訳なさそうに頭を下げるゾマリ。
「構わないよ。君のところの葬討部隊には世話になっているからね」
葬討部隊が狩った破面の多くはザエルアポロの要望により、彼の元へと実験の検体や材料として引き渡されている。ゾマリは目的のものを受け取ると、もう用は済んだとばかりにその場から立ち去らんとするが
「……またネリエルのところかい？」
ザエルアポロの問いかけに、足が止まる。
「…その鎮痛剤、今まで一度だって怪我を負ったことのない君に必要とは思えないな……彼女の頭はまだ痛むのかい？」
ザエルアポロはゾマリの手に握られた、彼女の依頼で作成した鎮痛剤を視界に捉えつつ、皮肉めいた笑みを浮かべながら続ける。
「隠さなくてもいいさ、君らは傍目から見ても仲が良さそうだったしね。……しかし、そんなに気になるならあの時ノイトラを止めていれば良かったろうに……今であれば難しいが、当時Ｎｏ．６（セスタ）の君とＮｏ．３（トレス）の彼女であればＮｏ．８（オクターバ）の彼に負けるはずがないのだからね……まあ見捨てたのは君の選択だ…僕がとやかく言うものでもないか」
ザエルアポロの言葉はゾマリの罪を、友を見捨てた彼女を、にも関わらず未練がましく追いすがる彼女を、容赦なく糾弾する。
ゾマリの体が少し震える。浅ましきその心根、それを暴き立てられたことで目を背けてきた卑小な己と否応なく対峙させられ
（……え？…コイツ何言ってんの？）
とかそんな複雑な思考をこいつが出来るわけもないか。

（……え？ネルと私が仲良し？え？マジで？……え？いや、会えば話すぐらいはしてたけどさ…そう見えてたの？…え？ネルのとこって何？どゆこと？これ、完全自分のための鎮痛剤なんだけど……え？）
　自責の念だとか罪悪感だとかそれ以前に心当たりがなさ過ぎてゾマリは軽いパニック状態にあった。
（え？は？え？……と、とにかく、このまま狼狽していてはいつも一歩引いた視点で周りを見渡せる常に冷静沈着な私のキャラが危うい……何か言わなくては！）
　自分でキャラとか言っちゃう痛々しい思考の末、何を言うかも考えつかないまま、顔を俯かせながら少し震えた声で彼女は呟く。
「……私…は…」
　しかし、その先を続けることをザエルアポロは許さなかった。
「おっと、知らなかったとでも？それは無理があるよ、ゾマリ。あの日に限って君は虚夜宮を留守にした、それが偶然だなんて……悪い冗談だ」
　ザエルアポロの鋭い追及にゾマリは
（え？……は？マジで何言ってんの、コイツ？…いや、知らねーよ、ネルいつの間にかいなくなってたし……たまたま虚夜宮出てるときにネルの頭かち割るイベントが重なってたんじゃねーの？……あーーーめんどくせえええええーーー）
　自分のキャラに照らし合わせた自然なセリフとやらを模索している最中に、またもや心当たりのまるでないことを言われ、いよいよ思考もドン詰まっていた。
　ゾマリは顔を上げると、どこか諦めたような態度でザエルアポロへと告げる。
「……いずれにせよ、格下に足元を掬われるようでは……十刃は務まりませんよ。Ｎｏ．３の座は…彼女には重すぎた」
　言い終わるとゾマリは足早に立ち去った。その背を、ザエルアポロは心底愉快そうに見つめていた。

（……ザエルアポロに妙なこと言われたから、なんか気になって見に来ちまった……相変わらず、いっつも同じことしてて飽きねーのかなコイツら……度々見に来る私も私だけどな）
ゾマリは第８十刃の宮を出た後、以前たまたま虚圏内を散策していた際に発見したネル一行の、無限追跡ごっこを観察していた。
（……何で特に面白くもないのに見ちまうんだろうなあー……ん？）
ふと、ネル一行が突然立ち止まった。

（！……またか……）
死の大地を駆ける、４つの影。
そのうち、蛇を思わせる長大な戦闘用霊蟲バワバワ、巨大な手足と頭部を持つ異形ドンドチャッカ・ビルスタン、似非特撮ヒーローペッシェ・ガティーシェの三体が懐かしい気配を近くに感じとり、立ち止まる。
（……ゾマリ・ルルー様）
ペッシェはかつての、虚夜宮での日々を思い出す。

……

「ゾマリ――！お昼一緒に食べよ？」
「…ネリエル……何度も言うようですが…私は食事は静かに一人で……」
「ほら、ペッシェもドンドチャッカも待ってるから、早く！」
「……はい」
明るく快活なネリエルと静かで常に落ち着いているゾマリ。

一見対照的にも映る二人だったが、その実、とてもよく似ていた。
どちらも任務とあれば妥協することはなく、無益な殺生を好まず、またペッシェ達従属官にも対等に接してくれていた。
虚らしからぬ理性的なその姿。
だからこそ惹かれ合ったのだろう。傍目から見てもあの二人は実に仲睦まじく見えた。

……

（……ああ、貴女はまだ……自分を許すことができないのでしょうね）
ゾマリがネリエルを見捨てたとも思えない。
その証拠に彼女はこうして度々、遠くからではあるが彼らの様子を見に訪れる。
（…葬討部隊ですか……恐らくはネル様のようなことを二度と起こさないように、でしょうね）
彼らが虚夜宮を去ってから出来たという葬討部隊の噂は彼らの耳にも届いていた。
曰く、規律の下に虐殺を繰り返す冷酷な殺戮機械。
しかし、彼らは確信していた。
その容赦のなさの裏には、ノイトラを止められなかった、かつての自分への後悔があるのだと。
「……ネル？どうした？」
ふと、ネリエル…いや、既に戦いの業から逃れた彼らの主、ネル・トゥが何処かあらぬ方向を見ていることに気づき、ペッシェは声をかけた。
「……何か、一人足りない気がスて……何でもないっス、それより何で急に止まるんスか！」
思わず言葉に詰まるペッシェ。
「…悪かったでヤンス!!ちょっと咽ちまってたでヤンス！」
代わりにドンドチャッカが矢継ぎ早に答える。

「え……汚っ……あんま近寄らないで欲しいっス」
そうとだけ呟くとまたペッシェ達から離れていくネル。その背を見つめながら、二人の従属官は静かに語り合う。
「……ペッシェ」
「……ゾマリ様の存在はネル様の記憶を刺激しかねない……あの方もそれは理解しているのだろう…決してこちらに姿を見せることはないのだからな……その気遣い、無碍には出来まい？」
「……ああ」
彼らは駆ける、ただ只管に。無限追跡ごっこはいつまでも続く。
ここに争いはない。しかし彼らは満たされない。
その空白を埋めるように、誤魔化すように、彼らは駆けるのだ。
いつまでも。